

Title	グスタフ・カッセル「経済学根本思想」の一節
Sub Title	
Author	高木, 寿一
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1926
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.20, No.2 (1926. 2) ,p.257(117)- 267(127)
JaLC DOI	10.14991/001.19260201-0117
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19260201-0117

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

せられざるものであらうか。吾人は猶相互に制することなくしては平和の國土に住せざるものなりや。法律なくしては吾人は相侵して以て悖亂に歸するものなりや。然れ共『嘗みに亂は何によりて起るかを察するに相愛せざるに起る』墨子。兼愛上第十四(ものにして)故に天下兼ねて愛すれば則ち治り交々相惡めば則ち亂る』ものである。洵に古代より神の王國は吾人の心境を支配したる憧憬である。古代は是を過古に求め現代は是を將來に打建てんとす。而して吾人の求むべき世界は

The World that we must seek is a world in which the creative spirit is alive, in which life is adventure full of joy and hope, based upon the impulse to construct than upon the desire to retain what we possess or siege what is possessed by others. It must be a world in which affections have free play, in which love is purged of the instinct for domination, in which cruelty and envy have been dispelled by happiness and the unfettered development of all the instincts build up life and fill it with mental delights (B. Russell Road to Freedom p. 210) (1) Then all mine and all thine shall be ours, (William Morris—The Day is Coming)
なるべし。斯る世界は單に之を『創造せんとする人を待つ』のみであらうか。

『洵に高尚なる精神は理想的なる神の國を迎望する。そは各人が絶高の自己否定の點に到達し道徳的完成のみを努力する状態であつて國民間と等しく個人間も平和の支配に置かれ生存競争は終末に告ぐるに至らう。人性が如何なる場合に於ても斯の如き理想状態に達し若しくは斯る道へ眞摯に進み得るものなりやは茲に論する必要はない。只人類が未だ斯る状態に到達する、と遙に遠きは之を認めなくてはならぬ。』(Thomas Henry Huxley, Essays, ethical and political 1903, p. 10.)

グスタフ・カッセル「經濟學根本思想」の一節

高 木 壽 一

1
ストックホルム大學教授グスタフ・カッセル氏が貨幣、金融、外國爲替の問題或は理論經濟學の諸問題に關し從來發表せる論文著書は殆ど枚擧に遑なく、經濟學界一方の雄たること夙に世人の認むる所なり。

カッセル教授の如き多數の著作を有する學者の勞作に接する者にとりては、之等の諸篇を通ずる根本思想を著者自らによりて教示せらるるとは多大の便益となるものなり。茲にカッセル教授自らも自己の經濟學的諸研究に於て嚮導觀念となれる根本思想を説明するの責任あるを感せられたり。之がために著はされたものは即ち Fundamental Thoughts in Economics (1925) なり。本書は章を分つて四にして

Chapter I. Aims and Methods of Economic Theory.

Chapter II. Economics as a Theory of Price.

Chapter III. The Principle of Scarcity and the Conception of Cost.

Chapter IV. The Scarcity Theory of Money.

の諸章を有す。茲に本書所説の全班を示すことは未だ卒讀の際、到底之を許さざるものあり。以下本文にありては、本書にありても殊に基本的部分をなせる、第一章「經濟理論の目的と研究法」に於ける所説の主旨を述べて本書の一斑を紹介するに止めんとするものなり。

二

惟ふに若し余の諸種の研究にして或意味に於て、假令決して完全にあらずとも、經濟學的體系と稱せられ得べき一の統一體を成すとせば、それは總べての場合に余の目的と研究方法とが研究さるべき主題の經濟的本質のみによりて決定さるるに努めたることに因るものなり。若し吾人にして終始此準則を遵奉せんか、經濟理論に於ては一般に信せられたる程に專斷を容るるの餘地なきものなることを發見すべし。實に經濟生活に於ては必然なること多く、經濟生活分析の方法に於ても必然なること多し。之等の必然性を發見することこそ重要なり。此事を行はんとし、又吾人が研究すべき問題に於て經濟的觀察點より見て本質的なるものに常に注意を傾倒せんか、其結果は自然的結合性と論理的統一とを有するを見るべし。此主要觀察點よりして以下經濟理論の目的及び研究方法の簡單なる敘述をなさんとするものなり。

經濟學が明にするを要する第一の問題は經濟學其自身の存立を論證する事なり。斯學の對象は經濟生活なり。然らば此經濟生活の渦中にありて日々實際に其問題に與かれる人々は、其圏外に在りて傍觀し唯現實の經濟事實の間接の知識を有し得るに過ぎざる者に比して、經濟生活をよく知れるにあらざるかとの疑問を生ずるは眞に自然の事なり。此點に關しては經濟學は必然不利なる立場に在り。然らば斯學にして其存在の理由を論證せんせば、經濟學は實務家によりては閑却せらるるも、而も本質的重要性と必然性を備ふる所の其獨自の目的を有することに因らざるべからず。こは眞に事實たる所にして、經濟生活の科學的觀察と實務的觀察との相異の一層綿密なる分析は、經濟學が其獨特の諸職分の明確なる觀察を得んと欲するに當りて、斯學其者にとりて極めて有用なるものなり。

第一に、科學は原因と結果を論ずるに當つて常に其全合成體を其對象とせざるべからず。科學は其連鎖中の或任意に採れる一環に止まるを得ず。經濟的實在に於て相互に不可分の關係にある諸事象總體を考察せざるべからず。經濟學は經濟生活を全體として考察すべく、實務家個人の見地よりすれば關係乏しき結果も、科學の見地よりせば、關係大なるものと少くも同一の重要性を有することあり。經濟學にとりて實際に重要なものは、經濟學は原則上常に全經濟單位を以て其對象となさざるべからずと云ふことなり。こは經濟學は常に其分析せんと欲する經濟を其自體封鎖の状態にありて外界と何等の關係なきものと假定すべしと云ふことを意味す。蓋し何等かの斯る關係存するとせば、原因結果の連鎖總體の完全なる觀察を得んには、其等の關係をも考慮に入れ、即ち其研究對象を擴大し一層大なれども其自體にて完全なる經濟單位を考察するを要すればなり。斯くて採れる單位は少にしては孤立的農民經濟たることあり、大にしては近世國民の經濟或は全世界の經濟たることあり。對象は研究の性質に従て決せらるべしと雖も、如何なる場合にありても一の封鎖的經濟たるべきことを肝要とす。斯る經濟は常に多少の廣表を有する社會組織にして、從て經濟學の對象

は常に必ず社會的現象なり。此事を強調せんがために經濟學の對象を「社會經濟」と稱するを適當とし、予の此問題に關する主著を「The Theory of Social Economy」と稱せる所以とす。

經濟問題の社會經濟的研究方法と私經濟的研究方法との間には實に本質的相異あり。其相異の大なるや、私經濟的意義に於て用ひられたる場合には全く正しき章句も、社會經濟に適用する場合には全然謬れることあり。私經濟的見地よりせば全く可能なる事の多くにして、社會經濟全體に擴大せられたる時には全然不可能なるを發見せらるべし。經濟學が實務經濟的考慮と異なる他の點は經濟學が常に經濟生活の實在 realities の把握に努むるに反し、實務家は其經濟的判斷に於て多く外部的形態を以て満足する事なり。外部的形態を通じて其背後に横はる現實實在を把握することを第一に其目的とすべし社會經濟的研究にとりては實務家の行ふ考察方法は明に不可能なり。されどこれは常に容易の業にあらず。實に經濟學者が此業を極め得る其方法如何は彼の研究の科學的價值及び實際的有用性の決定的要因たること大なり。勿論經濟學は實際生活に於て經濟的實在の表現さるる貨幣的形態を考慮せざるべからず。其結果多くの場合に於て經濟現象を第一には實質的實在の觀察點より、第二にその現はるるを常とする貨幣的形態の觀察點よりして二重の敘述を興ふるの必要を見るに到るべし。

經濟學の方法及び觀察點が實務家のものとは異なるのみならず、根本的諸點につきても亦通常經濟政策に於て特に重きをなせる觀念と異なる。實に政治家は單に自家の權力を用ふるのみにて自己の政策の論理的結果の發生を防止し得るものと信ずることすらあり。斯る權力尊重は當然非科學的なり。

勿論人間の意思は總べての經濟的行動の方向範圍を決定し、それによりて或程度まで全經濟的進歩の結果を決定すべし。こは吾人の所謂社會經濟の實に本質なり。されど總べてのもの悉くが生じ、悉くが獲得され得ると云ふは決して眞にあらず。確定的制限の存し、吾人の意の儘に除去し得ざる。嚴たる事實、必然的關係の存するものあり。

全く單純なる政治的權力偏重は廣く社會組織制度の理想的形態に關する思索に於て特に重きをなせり。此種の觀念は總べてのユートピア及び革命的企圖の究極の出發點をなすを見るべし。從て吾人の經濟生活の諸種の方面が如何なる程度まで其社會組織、社會制度を離れて存するか或は之に左右さるるかを研究するは極めて重要なことなり。實に此點に經濟理論の最も重要な業務の一の存するなり。此業務を行はんがためには、經濟理論は其研究の各々に於て其結果が如何なる程度の妥當性を有するか、其結果は社會の特殊形態に關係なきか又其程度如何、若し其左右さるるを示さば他の想像し得る形態の社會に於ては如何に現はるべきか等を明瞭にせざるべからず。社會狀態の研究者にとりて以上の諸原則に従ひて終始完全なる社會經濟の研究、貨幣的形態の下に於ける經濟生活の實在の研究、其諸現象及び其諸關係の必然性の程度に關する研究に努むべき社會經濟理論に依頼するは元より極めて重要なことにして、斯る理論にして始めて所謂「社會問題」につきて明白なる概念を得るの助けとなり得るなり。

經濟理論の之等の目的は既に吾人に其研究方法に關し貴重なる一般的指針を興ふるものなり。されど研究法及び諸研究法の撰擇を支配すべき諸原則の問題は一層綿密なる分析を要す。研究法撰擇

につきても或必然の要素あり、少くとも從來特に盛んなりし如き全然任意の撰擇を許さざるものあり。經濟學研究法撰擇に於ては經濟的考慮によりて決定すべしと云ふは極めて簡單なる準則たるが如きも而も尙一般に無視せられ、經濟學の多くの重要な論策が經濟的觀察よりも寧ろ技術的其他の關係外の觀察點よりして左右さるること屢なり。

第一に、經濟學の採るべき一般方法を見る。經濟學の對象とする一定社會單位の經濟の本質は或程度まで社會秩序によりて影響を受け又或程度までは此要因の影響を彼らす。此獨立性の程度及び各研究に於て其結論の現實の妥當性如何を示すは經濟學の一の根本的業務なり。

此目的のために吾人は基本的諸研究に於て常に社會組織社會制度に關し最少限の假説を設くるを原則とすべし。然らば吾人の結論は其事實有する全幅の妥當性を示すべし。經濟的研究の當初に於ては社會秩序に關して少しも假説を設けずとせば、吾人は外的條件に關せず如何なる社會經濟にも一般的妥當性を有する結論に到達すべし。之等の結論は經濟的必然性の實に眞髓を明にすべし。若し更に現代の經濟事情に即せんとせば社會秩序に關し更に特殊の假説を要す。殊に最も重要な交換經濟 an exchange economy の假定なり。此交換經濟に特有なる新諸現象の全班、殊に先づ第一には總べての價格現象及び價格決定の全行程、は考慮の中に入るべし。從て研究の結果は狹隘なる妥當性を有することとなり、更に假説を設くるに從て更に制限せらるべし。當該研究の本質に關し必要以上の假定をなさざるに注意し、研究結果の妥當性を必要以上に制限し其結果眞理の一斑殊に該問題につき最も大切なる眞理の一部を失ふことなからしむるは重要なことなり。

此準則の遵奉により、經濟状態は任意の社會秩序改革と如何なる程度まで關係なきかを示すと共に又斯る社會經濟研究は重要な經濟現象の眞相を深く究むるの手段となるを以て科學其者にとりても極めて重要なものなり。

現代經濟生活の或特徴は假設的純社會主義社會に於ては如何に現はるべきか、其現象は如何なる變化を被るかにつき考察することは時に有用なり。斯る研究は社會主義者の獨斷的信念の根據なきことを示すと同時に、現代社會經濟の本質的方面の了解を易からしむるに適せり。蓋し或點より見れば、假定的社會主義社會は交換經濟の理論上最簡單なる形態と看做さるべく、斯る假設的經濟の理論的解剖は現代實際の經濟の現實の諸問題を明にするに有益なる手段となるべきを以てなり。されど經濟は本質に於て社會的行程なるを以て所謂「クルーソー經濟學」に就ては到底同一の言はなし能はざるなり。

其對象に關しては、經濟學は最簡單、從て最も抽象的なる事實より一層複雑、具體的の事實に及ぶべきなり。研究進路は任意に撰ぶべきものにあらずして、考察さるる實在の根本的性質によりて專ら決定せらる。經濟生活を錯雜ならしむる主なる且つ最も一般的のものは經濟生活の間斷なき可變性より生ずるなり。然らば抽象より具體に移る各階段は既に經濟理論に對して定まれるものあり。第一階段に於て吾人は全く可變性を除外し、從て純「靜的經濟」を以て吾人の研究の對象となす。第二階段に於て、靜的形態に於て取扱ひ得るが如き動的状態を設く、即ち「劃一發展的經濟」"Uniformly Progressive Economy"を研究すべし。之を準靜的階段とも稱し得べし。第三階段に到つて正に「經

濟動學と稱すべきものを研究することとなる。

此經過は經濟學對象の本質の論理的結果にして其各階段に於て異なる研究方法を用ふるを要す。第一、第二階段に於ては明かに純演繹法を必要とす。蓋し之等の階段に於て吾人が出發點とする假説は抽象的にして、現實世界に於ては斯る階段の觀察すべきものなければなり。されど動學に到るや吾人は既に研究せる劃一的發展に照して實際生活が示す錯行を研究し、其原因を明にするは唯歸納法の助けありてのみ始めて可能なること明なり。

靜的經濟及び劃一發展的經濟の假説は其者の中に必然の要素を有するものなり。こは靜的經濟につきては明なり。劃一發展的經濟研究は發展的經濟の觀念を能ふ限り單純化し、又經濟生活の本質的特徴の明確なる觀念を興へ、更に純動的狀態の研究のためには實際經濟狀態に於て生ずる變動との比較の標準として必要なり。之によりて何故劃一的發展の研究が更に進んで總べての動的經濟を研究するに絶對に必要欠くべからざるを直ちに明にすべし。茲に示されたる諸假説を以て充分にして、他に一般單純化の假説を設くるは其必要なく且つ又本質的に誤れることあり。

經濟生活の一の本質的特徴は經濟生活の常に繼續し、從て始、終を知らざる事なり。其結果經濟學は「永續的」經濟、殊に永續的生產行程を其對象とせざるべからず、此觀察は經濟理論の最も重要にして中心をなす諸問題の概念に對すると同時に之等の問題研究のために採らるべき方法に對しても決定力を有するものなり。或財貨の生産を始めより終まで檢するのみなる舊研究法は技術的考察に從ひて作られたるものにして經濟的考察に從ふものにあらず。斯る研究に對しては經濟生活の本質的特徴の多くは根本に於て了解不可能なり。

實に繼續的經濟を研究せざるべからざるは、吾人が常に完全なる社會經濟を研究の主題となすべしと云ふ一般原則の結果たるにすぎず。蓋し社會經濟は繼續的存在を有し、其圈内に行はるる各個の業務の一次的性質を備へざるを以てなり。

之等の諸研究原則と、前述の靜的階段より劃一的發展の準靜的階段に、最後に動的階段に進むと云ふ原則とを結合せば全研究の決定に達し、總べてのものが不變にして從て經濟理論の最根本的觀念を最も簡單に定義する最善の機會を有する繼續的靜止的經濟より進んで、殊に貯蓄及び資本蓄積の新概念の生じ且つ絶對的不變の現象として研究され得べき劃一的發展の繼續的經濟に及び、茲に到つて同じく繼續的經濟を研究するも其動的狀態を研究することとなる。斯くて吾人は簡單に以上を以て、經濟理論研究方法を經濟生活其者の本質的諸要素並に之等の要素が必然經濟理論研究法に課する要求を意識し嚴密に遵奉して研究法を撰定することが、經濟理論にとりて如何に根本的重要性を有するかを明かならしめたりと信す。

經濟學は本質的に數量に關す。從て吾人は經濟生活に於て吾人の注意するに足る如何なる事につきても數量的概念を得ることに努めざるべからず。從來經濟學は論せらるる諸觀念の數量的決定を欠けるがために重大なる損害を蒙れり。漠然たる語句を以て觀念を示して満足する者極めて多けれども、こは決して眞に科學的研究法にあらず。吾人は能ふ限り經濟的推理を假令極めて概數たりとも現實の數字の上に立つることに努めざるべからず。概數或は假設的數字さへも全く無きには優る

ものなり。蓋し吾人が全然誤れる結論を引くを防ぎ、考慮すべき諸種の要因の相對的重要性を明かにするに必要なるを以てなり。經濟學に於て至要なるは量的諸關係にして、若し吾人にして量的規準によりて本質的要因と非本質的要因との區別をなし得ざるに於て重大なる誤謬を生じ易く又尊重すべき結果に達すること多く望むべからず。經濟學に於ける量的考察の有用なるを示す好例は屢々數個の原因が或一定の結果に責任あり、之等の原因の記述を要するが如き場合に見るべし。此事は、各個の原因の效果の量的觀念を明にし得るに於て始めて可能となるなり。先づ最も本質的の諸原則を發見し、其等の共同の效果を總結果より減すれば、明にされざる所は少なる範圍にすぎざることとなり、其後の研究に明確なる結構を與ふ。吾人が其以上に進み得ざることなきにはあらざれども、最も多くの場合に於て、其後の研究は斯る研究範圍の制限と、未知の小要因が既知の本質的要因に照して考察し得る事によりて、極めて著しく促進せらる。斯る量的研究法の有用なることは、殊に所謂貨幣數量説、利子理論、外國爲替理論等に於て見るべし。總べての動的狀態研究に於て量的研究方法は決定的重要性を有す。斯る研究は常に既述の如く、先づ劃一的發展を表はす正常曲線を示し、然る後、現實の發展運動を正常曲線よりの歪みとして測定し得るなり。斯る問題に於ては吾人は決して極めて漠然たる形容句を以てする質的推理を以て満足し得ず、量的研究法を嚴密に適用するによりて始めて何等かの明確なる結果に導き得るなり。

②最後に經濟學に於て「定義」を設くる方法を見る。此方面に於ても亦、專斷的方法、非經濟的觀

離減裂の狀態に惱みつゝあり。此悲むべき狀態を打開する唯一の途は、經濟學の區別並に定義は經濟生活の本質的實在によりて決せらるべしと云ふ原則を堅く遵奉するにあり。人は決して其名を有すべき物其ものが明に理解さるるに先立ちて名稱を與ふべからず。故に第一の業務は經濟生活の諸事實、諸關係に於ける本質的なるものの分析にあり。之にして明なるに到つて始めて、經濟の本質に適合する區別を立つるを得て、且つ定義を用ふるの時に達するなり。例令、資本の概念は先驗的ア prioriに導入せらるべきにあらず。然らば、此概念に與へらるる範圍並に意義につき全然專斷の行はるるに到るべきこと既に長き經驗の示す所なり。吾人は先づ資本概念の導入を必要とする經濟的實在の檢討に始めざるべからず。吾人がそれをなし得るは唯靜止的經濟と劃一發展的經濟の二種の根本的單純化を行ふによるの外なし。

經濟理論の如き實際科學の用語が實際生活の用語に能ふ限りよく合致すべきは元より望まじきことなり。されど、世人の間に行はるゝ漠然不定の經濟的觀念は、屢々誤謬と矛盾とを含む漠然不定の語にて表はさるるを以て、經濟學は實業界並に世人一般の用語と可及的密接の關係を保つに努むべきものなりと雖も、而も經濟學独自の標識を用ひ又經濟學の諸名辭に一層明確なる意義を與ふることを犠牲になし得る所にはあらず。

以上を以て吾人は經濟理論の目的並に研究方法に關して最も根本的なるものを説明するに努めたり。之等の目的並に研究方法は經濟理論重要問題の研究に極めて貴重なる指針を與ふるものにして以下の本書諸章に於ては以上の所説に基きて重要諸問題を研究せる主なる結果を提示せんとするものなり。